

ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち』を読む

1. 本書の性格

- ・ 90年代デリダの「倫理 - 政治的転回」 Cf. 『友愛のポリティックス』 『法の力』
- ・ 「歴史の終わり」 (F・フクヤマ) / 「新世界秩序」への批判
- ・ 「新たなインターナショナル」の再解釈

2. マルクス (主義) の復権?

- ・ いま本当にマルクスは読まれているのか / 終焉の言説そのものの終わり
- ・ デリダは本当にマルクスを読んでいるのか
- ・ アルチュセールへのオマージュ

3. なぜ「亡霊」なのか?

- ・ マルクスの精神＝霊 (Geist) への回帰
- ・ 憑在論：亡霊的再来のパラドクシー
- ・ 死すべき者が生き延びるための亡霊

4. 亡霊論としてのマルクス像の射程

- ・ 宗教とテクノロジーの問題系の交叉
- ・ 現代世界における「宗教的なものの回帰」
- ・ メディア＝テクノロジーのバイザー (眉庇) 効果

5. 「メシアニズムなきメシア的なもの」の問題点

- ・ ポスト世俗的なメシアニズムへの転回 (ジジェク)
- ・ 純粋な他者の超越化による倫理主義への傾斜
- ・ なぜそれでもなお「メシア」と呼ぶのか?

6. 砂漠のなかのメシア的唯物論

- ・ あらゆる宗教批判の後に残り続ける「信 (foi)」の構造
- ・ 正義としての革命的出来事 / 絶対的な歓待の約束
- ・ 「砂漠のなかの砂漠」のメシアニズム Cf. ベンヤミン「弱いメシア的な力」